

地域づくり表彰

一般社団法人 釜川から育む会（栃木県宇都宮市）

関係人口の創出による人と生きものの共生

一般社団法人
釜川から育む会

代表理事

なかむら しゅう
中村 周



1. 宇都宮市の概要

宇都宮市は、栃木県のほぼ中央に位置する県庁所在地です。面積は416.85km²、人口は約52万人の中核市であり、栃木県の面積の6.5%、人口の27%を占めています。その宇都宮市の北西部から、市の中心部を横断するように、釜川から育む会（以下「育む会」）が活動する釜川が流れています。

釜川は、宇都宮市内で完結する全長約7.3kmの一級河川です。日光の山々から集まる地下水が西弁天沼と東弁天沼から湧き出し、上流部の田園地帯を流れています。中流では宇都宮市郊外部の住宅地、下流部では宇都宮市の中心市街地を流れたのちに、田川に合流します。下流部では、かつての度重なる洪水を契機に1988年に日本で初めて二層化式河川工事が行われ、さらに1992年には、水と緑が感じられる水辺空間「釜川プロムナード」が整備されています。文化的特性として、明治から昭和にかけて、宮染めの染工場が立地し、染織工芸が盛んでした。また、花街として栄えた時期もあり、その限界性も残っています。



釜川全体図



釜川から育む会の主な活動内容

2. 活動開始の背景・経緯

育む会代表の中村は、学生時代に「地方都市中心市街地における空地の形態構成に関する研究」に取り組んでいる中、2013年に釜川下流部の空き家をKAMAGAWA POCKETとしてリノベーションし、そこを拠点にアート・音楽プロジェクトの展開や、マルシェイベントの企画・運営等を通し、周辺店舗や地域住民と活動していました。

そして2017年に、宇都宮市が釜川を景観形成重点地区への指定を目指す動きがあり、建物の外壁の色や看板の大きさ等を定量的に規制するだけでなく、釜川に生息する生きものや人々の活動と路地・河川・建物といった都市空間の関係性など、複雑な視点から釜川らしい風景を育んでいく事が重要と考え、民間発意による未来ビジョンを策定するために「釜川から育む会」を設立しました。2018年に未来ビジョンのβ版を策定後、宇都宮市や地元自治会・商店会、有識者による官民連携のエリアプラットフォーム「カマクリ協議会」に中心団体として参画し、2022年に官地と民地の一体的な活用による人と生きものの共生を目標にした「みんなでつくる 釜川ミライ Ver. 0.1」を策定しています。

このような背景、経緯を踏まえながら、これまで、シンポジウムやワークショップ、定期的な勉強会を通して、自然環境や、街並み、文化、日常の営みといった視点から自治会・商店街等の地域住民や地権者等と意見交換を図りつつ、魅力発信・創造に向けた活動に取り組んできました。

3. 活動の内容

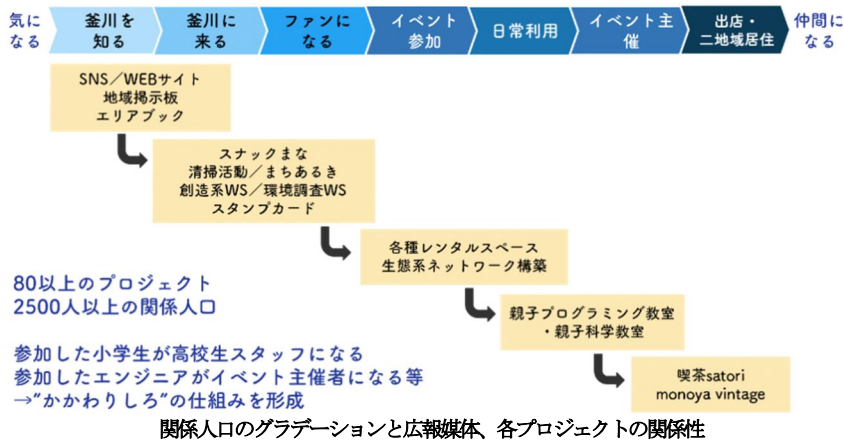
1) 活動の全体像

育む会では、釜川周辺の遊休不動産（空き地、空きビル等）を活用した①エリアリノベーション、釜川の生物調査やビオトープ、魚道設置等による②生態系ネットワークの構築、釜川周辺地域に出入りするクリエイターとの協働による空き地、空き家等を活用したアートプロジェクトやレクチャーイベント等の③クリエイティブプロジェクトの3つの軸をもって、各種プロジェクトを展開しています。

その中で、各プロジェクト共通して、リサーチの積み重ねを踏まえたプロジェクト展開と、関係人口創出の仕組みづくりを特に意識しています。

2) リサーチの積み重ね

2017年の育む会設立以降、建築、都市計画、環境生態、関係人口、ランド



スケープ、地域ブランディング、アート、グラフィックデザイン、更には地域で個人商い等を行う専門家・実務者と連携し、釜川やその周辺の生態系や文化などのリサーチを積み重ねてきました。そこから導出された「釜川らしさ」や課題を踏まえたプロジェクトを展開するとともに、プロジェクト間やプロジェクト毎でのOODAループを踏まえた各年度の取組内容、課題を評価のうえ、活動内容の改善や新たな活動への展開を図っています。これらの積み重ねにより、2024年度は10以上のプロジェクトを展開しています。

3) 関係人口創出の仕組みづくり

長年の活動実施、そこから見えてきた関係人口のグラデーションと広報媒体、各プロジェクトの関係性を踏まえ、育む会の活動参加をきっかけに、釜川を知り、ファンになり、育む会と一緒にイベント等を企画・実施する仲間になる動線を意識した情報発信、イベント実施、活動伴走支援を戦略的に展開しています。この取り組みにより、かつて環境調査ワークショップに参加した小学生が、その後高校生となり、育む会のスタッフとして運営に関わる、レクチャーイベントやワークショップに参加した地元のエンジニアや理系子育てママが、その後釜川で親子プログラミング教室や科学実験教室を主催する等の動きを生み出しています。

4. これまでの成果

1) 関係人口の創出

2013年のKAMAGAWA POCKETのリノベーション以降、これまで80以上のプロジェクトを実施し、延べ2,500人以上の関係人口を創出してきました。この中には、前述の関係人口創出の仕組み

づくりを意識したイベント等を多数展開しています。こういった活動により、地域内外の事務局メンバーやボランティアスタッフが増え、LINEグループやチャットツールを活用した、緩やかで居心地の良い関係人口ネットワークが形成されつつあります。

2) 情報発信

長年のリサーチ成果の活用と独自取材を基に、釜川の文化、界索性や生きものなどを発信するエリアブックを2023年に作成しました。これまで、地元物販・飲食店や宇都宮駅にて来街者向けに設置・配布し、計1万部を発行しています。併せて、イベント情報や、釜川の生きもの、文化、日常の様子等をSNS等で発信しており、2024年10月時点のX (旧Twitter) は6,200フォロワー以上となっています。

3) 地理解の醸成と人と生きものの拠点拡大

地域住民や周辺事業者をターゲットに、釜川に関するワークショップや地域づくりに関する取り組みができる機会を創出してきました。この中では、二層化工事から30年以上経過して老朽化が進む河川工作物の更新や、長年放置されていた空き家や空き地を利活用する機運を高めていくことも図っています。これによって、年々活動拠点となる土地、建物等は増加し、2024年10月時点で7施設まで拡大しています。また、河川空間内には、生きものの居場所となる魚道やビオトープの創出実験を行い、上流に生息する希少種が下流でも確認されるようになりました。こういった人と生きものの拠点整備の際には、路地・水辺・界索性を活かした釜川らしい建物や工作物を設計するように心がけています。さらに、地元の理解醸成による

成果のひとつとして、2023年のKMGW BOOKSプロジェクトにてクラウドファンディングを実施し、計207名から216万円支援頂くとともに、地元企業から600万円以上の協賛金を受けています。

5. 課題と展望

現在の課題として以下のものが挙げられます。

- ① 安定した活動資金の確保
- ② 不動産の取得
- ③ リサーチ結果の共有・継承
- ④ プレイヤー・マネージャーの不足

①現状、活動資金の約半数を交付金・補助金・協賛金等に頼っており、継続的に活動するには、安定した資金確保が必要です。そのために、管理・運営する不動産物件を増やし、賃料による安定した収入を目指しています。

②活動エリア内には多数の空き家・空き地がある一方で、登記が古く所有者が不明だったり、円滑に相続されていない等、様々な理由により利活用が難しい物件が多くみられます。今後も所有者が分かっている物件から1軒1軒地道にアプローチを続けませんが、登記等では分からない所有者については行政機関の協力が不可欠で、その仕組みづくりの検討を始めています。

③「釜川らしさ」をさらに深めていくために、これまでリサーチしてきた様々な調査結果や多くの文献・資料を、クリエイターがすぐに参照できたり、次の世代に継承するためのアーカイブが必要と考え、空き家・空き地利活用の一環として釜川に特化した郷土資料館のようなものを整備することを検討しています。

④関係人口創出の仕組みが軌道に乗り始めた一方で、主体的に活動するプレイヤーとプレイヤーやボランティアをマネジメントするマネージャーが相対的に不足しており、そういった人材の発掘や育成を進めています。

また、今後の展望としては、釜川プロムナード整備協議会を始めとする、釜川周辺で活動している複数のまちづくり組織と連携し、老朽化した河川工作物の更新を見越した、かわまちづくり計画策定を検討しています。これによって、官地と民地の一体的な利活用による人と生きものの共生の実現が一步近づくと考えています。